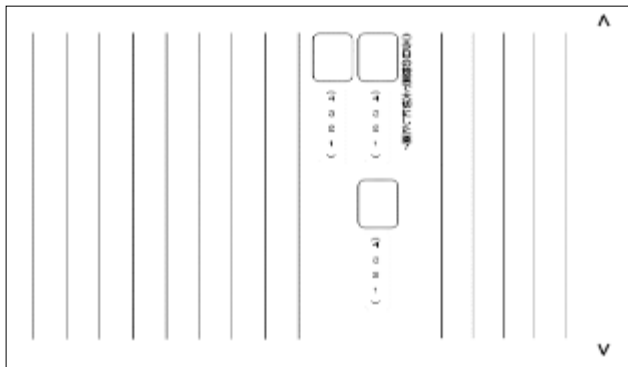


学校名	研究課題	研究手法
粟崎小学校	道徳	家庭との連携

1 研究の重点と具体的な取組

(1) 重点1 多面的・多角的に考え、道徳的価値の自覚を深める工夫

より質の高い道徳の授業を行うため、学習活動において重要とされている学びの観点である「粟7（あわせブン）」を作成し、活用する。教師はねらいをより明確にして授業を組み立てることができ、児童と何をどのように学ぶかを共有しながら授業を行うことができる。授業後に教師は児童のふり返りを見て自分の授業を評価し、授業改善につなげていく。



粟7のふり返りができる  
道徳ノート「あわはーと」

**粟7（あわせブン）**

- 1 **たいせつなこと**  
たいせつなことを 見つめよう
- 2 **くらべて**  
くらべて 考えよう
- 3 **わけ**  
わけを 考えよう
- 4 **考えを 聞いて**  
みんなの 考えを 聞いて 考えよう
- 5 **これまでの 自分**  
これまでの 自分を ふりかえって 考えよう
- 6 **これからの 自分**  
これからの 自分を 考えよう
- 7 **今日の 学び**  
今日の 学びを ふりかえろう

粟7（あわせブン）

	選んだあわせ?	実定時児童の割合 (%)	C: 検証 (この結果を基に、手立てはねらいを達成する上で有効だったか)	A: 改善 (Cを基に、次の授業にどう生かすか)
2/13	2/13	74%	有効: 児童の理解が 深まった。	3/13 児童の理解が 深まった。
3/13	3/13	74%	有効: 児童の理解が 深まった。	3/13 児童の理解が 深まった。
4/13	4/13	78%	有効: 児童の理解が 深まった。	4/13 児童の理解が 深まった。
5/13	5/13	63%	有効: 児童の理解が 深まった。	5/13 児童の理解が 深まった。
6/13	6/13	80%	有効: 児童の理解が 深まった。	6/13 児童の理解が 深まった。
7/13	7/13	87%	有効: 児童の理解が 深まった。	7/13 児童の理解が 深まった。

教師用ふり返りシート

(2) 重点2 道徳科と教育活動全体をつなぐ工夫

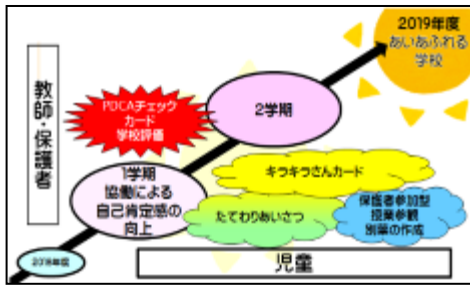
昨年度の課題を生かし、①教育目標である「協働・挑戦・継続」、②CAP-DにおけるCとAのつながり、③三委員会で行う活動の一貫性、④家庭地域との連携を充実させるために、道徳を中心としたカリキュラム・マネジメントを学校研究の柱とする。

学期ごとに具体的な目標を定め、1・2・3学期のスリースパイラルで取り組む。

各学期の取組については以下の通りである。



道徳性を育むスリースパイラル



1学期「協働」



2学期「継続」



3学期「挑戦」

これらの取組をさらに効果的に行うため、別葉の配列や重点の見直しを行う。検証については、毎月 PDCA チェックカードを取り入れて児童と教師、両面の評価をすることで、学期ごとにどのように力が付いたかを確かめられるようにする。

### (3) 重点3 多様な場面を活用した地域・家庭とのつながり

#### ①おたやの森プロジェクト

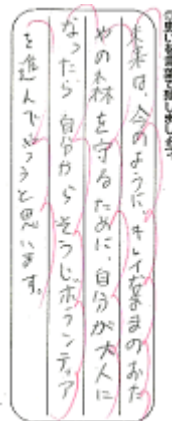
地域学校協働活動事業や学校運営協議会などを活用し、「おたやの森」を中心に据え、地域・家庭が一体となって児童を育てていく意識を高める。



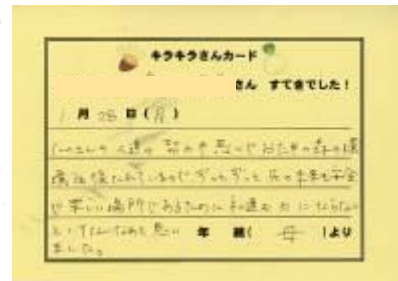
落ち枝拾いをする児童



「おたやの森」の道徳科の授業



児童の感想と保護者の感想



#### ②地域・家庭と共につくる道徳の授業

4月の授業参観で「保護者参加型授業」（道徳）を全クラスで行うことを皮切りに、公民館の館長さんをはじめとしたボランティアの方々と共に考える道徳の授業づくりを行うことで、多面的・多角的な話し合いへと発展させ、児童の道徳性を育む。

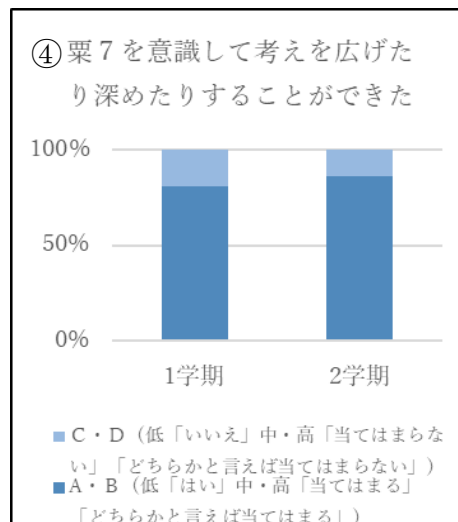
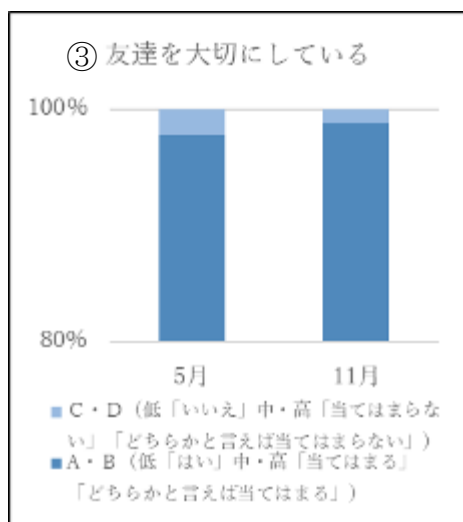
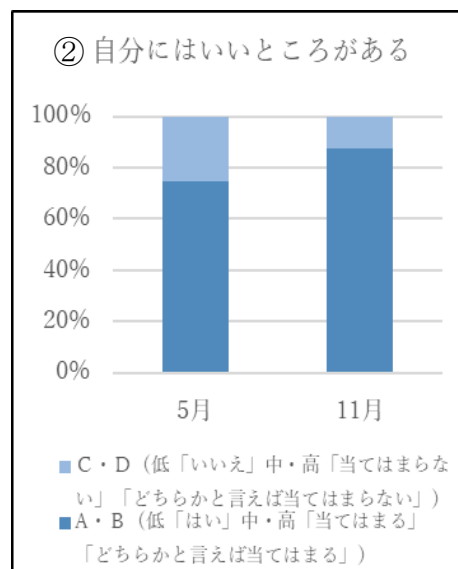
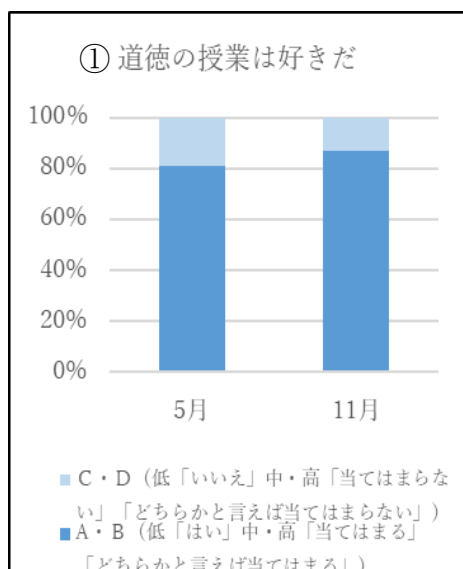


保護者や地域の方々をつくる参加型の授業

## 2 取組の検証

### (1) 児童アンケートより

下記のグラフは、児童を対象に実施した道徳アンケート結果と、毎月実施しているPDCAチェックカードの児童回答の結果である。「道徳の授業は好きだ」「自分にはいいところがある」「友達を大切にしている」「栗7（あわせブン）を意識して考えを広げたり深めたりすることができた」において、肯定的評価（A+B）の割合が増加した。これらの変化から、道徳の授業をはじめとした学校教育活動の充実が図れたことが見て取れた。



道徳アンケート (①②③) と PDC (④) A の結果

### (2) 学校アンケートより

昨年度に続き、保護者アンケートを行った。質問項目の中で、道徳の内容項目にかかわる「思いやりの心がはぐくまれている」「命の大切さについてよく指導している」において、肯定的評価（A・B）が95%であった。また、昨年度に比べ、同項目におけるAの割合が5～11%上昇した。このことから、道徳教育の充実が、家庭での児童の姿に現れてきていると考えられる。

### (3) 学校運営協議会より

今年度は、「保護者参加型授業」（道徳）に取り組んだり、地域の方々にゲストティーチャーや参加型の学習に加わってもらったりした。参加された保護者や地域の方々から、以下のような声が聞かれた。

- ・子どもたちの意見を聞くことができるとてもよい機会だった。
- ・子どもたちがよく考えていてびっくりした。なるほどと思う意見がたくさんあり、とても楽しく話し合いに参加することができた。

## 3 成果と課題

### (1) 重点1 多面的・多角的に考え、道徳的価値の自覚を深める工夫

「栗7（あわせブン）」の活用により、教師はねらいをより明確にして授業を組み立てることができ、児童と何をどのように学ぶかを共有しながら授業を行うことができた。授業後に教師は児童のふり返りを見て自分の授業を評価し、授業改善につなげることができた。児童は自己評価を次の授業に生かしていくことができた。

「栗7（あわせブン）」をくり返し用いたことで、学びの観点が児童に浸透してきた。その成果として、道徳の授業だけでなく、各教科においても「栗7（あわせブン）」を児童が主体的に活用しようとする姿が見られている。

今後も引き続き「栗7（あわせブン）」を活用し「褒め・認め・勇気づける」ことを充実させることで、児童の実態に応じた発問を組み立て、より児童が自分事として考えられるようにしていく。

### (2) 重点2 道徳科と教育活動全体をつなぐ工夫

学校の教育活動を見直し、カリキュラム・マネジメントを行い、CAP-Dを活用しながら1学期から3学期の3スパイラル構造の研究を進めた。また道徳を中心に地域・家庭との連携を深められるよう取り組んできた。ゲストティーチャーを招いた道徳の授業をはじめとし、「保護者参加型授業」や学習発表会・感謝の会など、学校の教育活動全体の時期や内容などを意識して道徳の授業に取り組んだことで、より児童の道徳性を育むことに繋がったと考える。

### (3) 重点3 多様な場面を活用した地域・家庭とのつながり

地域学校協働活動事業の一つとして実施した「おたやの森プロジェクト」後、全学級で道徳の授業を実践し、学校を支える人の気持ちや、自分とのかかわりについて考えた。その授業での児童の感想を保護者に伝え、コメントを書いてもらうことで、全保護者を巻き込んだ道徳教育の実践ができた。そこには地域を大切にしたいという共通の思いがあることから、学校と家庭との間に信頼関係や協働意識が芽生えたことが、大きな成果であった。